Bull. Soc. Sea Water Sci., Jpn., 70, 245 – 251 (2016)

資料 6－②

Bulletin of the Society of
Sea Water Science, Japan

特集「里山・里地・里海の多面的機能の総合評価と豊かな海と地域づくりに向けた取り組み」
(解説)

蛤浜プロジェクト

亀山　貴一*

Hamagurihama Project

Takakazu KAMEYAMA *

1. はじめに

平成23年3月11日に発生した東日本大震災は未曾有の大津波を引き起こし，住環境，産業，自然・生態系に甚大な被害を与えるとともに尊い多くの人命を奪った．人口約15万人の石巻市は直接死3,279人，行方不明者425人[1]と被災3県の市町村で最も人的被害が大きい．特に半島部である牡鹿地区，雄勝地区は浸水エリアが大きく，元々問題であった過疎が震災によって急激に加速した．弊団体が活動の中心とする牡鹿半島では，牡鹿地区の人口が4,577人（平成22年）から3,232人（平成26年）へと29.4％減少し，荻浜地区が1,040人（平成22年）から586人（平成26年）へと43.7％減少と震災前から比べ著しい人口減少が起こっている[2]．12の集落からなる荻浜地区は，どの集落も高台にあった住宅以外はほとんどが津波で流出しており，津波の浸水エリアは住宅を建設することができない災害危険区域に指定されている（住宅以外は可）．そのため集落ごとに希望者が5世帯集まれば高台に住宅を再建する用地が造成される高台移転事業が実施された．平成28年5月現在では，高台用地の造成が概ね終わり，仮設住宅から自立再建住宅または復興公営住宅へと移っている．しかしながら，どの集落も高台移転が完了し，残った世帯と合わせても10世帯に満たない数しかなく，そのほとんどが60歳以上の高齢者である．このままでは世帯数の急激な減少と過疎高齢化によって各集落の維持が極めて困難になる．

筆者が生まれ育った蛤浜は牡鹿半島で最も小さい集落で，震災前でも9世帯しかない限界集落である．津波によって多くの家が流出し，現在残っている建物は4軒の住宅と集会所のみで，実際に住んでいるのは2世帯人口5人である．震災直後は集会所が残っていたため，住民は約半年間共同で避難生活を送ったが，高台移転希望者が5世帯に満たず，避難所解散とともに市街地へと引っ越していった．震災から1年が経過した頃，大きな瓦礫は撤去されたが細かいものはまだまだ残っており，海岸は手つかずのままであった．また，震災前の蛤浜は牡鹿半島で数少ない砂浜があったため，夏は海水浴客で賑わっていたが，約70 cmの地盤沈下によって砂浜が消失し，訪れる人もいなくなった．磯ではワカメ，ヒジキ，フノリ，マツモなどの海藻やイボニシやクボガイなどの巻貝を採取することが住民の楽しみと副収入になっていたが，地盤沈下によってできなくなってしまった．海中環境もアマモ場が消失し，瓦礫にはホンダワラが付着繁茂し，大きく変わった．

2. 蛤浜プロジェクト

筆者は震災当時宮城県水産高等学校の教諭をしており，学校も津波による損壊のため移転を余儀なくされた．生徒の約8割が被災しており，実習設備や施設が使用できなくなったことで，そのケアと復旧対応に追われる日々であった．蛤浜の自宅は高台にあったため無事だったが，妻が津波で亡くなり市街地で暮らすことを選んだ．また，津波の被害だけでなく，2011年9月の台風によって土砂崩れが発生し，隣の空き家が倒壊，自宅にも土砂が入り込んだ．

震災から一年が経過した2012年の3月に久しぶりに蛤浜に行くと残った世帯はわずか3世帯，住民と話をすると先行きは暗く，不安でいっぱいの様子であった．それでも漁業を再開したいという区長さんの強い想いや津波で集落が壊滅的になっても綺麗な海や山を見ると，この集落の暮らしをここで途切らせることなく後世に残していきたいという気持ちが沸々と湧き上がってきた（**Figs. 1, 2**）．浸水したエリアは災害危険区域に指定されているため住居を建設することができない．そのため，現在の世帯数で集落を継続していく仕組みが必要になる．そこで考えた計画が，地域資源を活かした六次産業化によって雇用を創出すること，教育や協働によって継続的に関わる人を増やすことの二つである．里海の資源を活用した持続可能な浜づくりを目的に，暮らし，産業，教育を三つの柱にプランを作成した．季節の食材を提供するカフェやレストラン，浜の暮らしを体験出来る宿，海に親しむマリンレジャーや自然学校，ギャラリーなど，まずは交流人口の拡大を目指した．この

* 一般社団法人はまのね（〒986-2354　宮城県石巻市桃浦字蛤浜18）
General Incorporated Association Hamanone, 18 Hamagurihama, Momonoura, Ishinomaki-shi, Miyagi 986-2354, Japan

Fig. 1　現在の蛤浜

Fig. 2　津波後の蛤浜

計画を住民と地権者に相談し同意を得ることができた．しかしながら，土地を活用させてもらうことには賛同をもらったが，高齢者は一緒に活動することは難しく，同世代も今の仕事を辞めてまで一緒に動くことはできなかった．そこで，当時支援で関わって頂いていたNPOや大学，行政の担当者などに相談したが，親身になって聞いてくださるものの，資金面や人材確保の部分は一向に目処がつかなかった．

そのようなときに出会ったのが，NPO法人オンザロードで約一年間ボランティア活動をし，その後もNEXT石巻という団体を立ち上げて継続した活動をしていたメンバーであった．蛤浜プロジェクトのビジョンに共感してくれたNEXT石巻は，資金はなかったが，毎週末4,5人が集まり，土砂崩れで埋まった自宅や庭の泥かきをスタートした．その後，泥かきが終わると住宅跡に残る瓦礫や手付かずだった海岸の瓦礫撤去を行った．次第に活動に共感してくださる人々が増え，多い時には1日100人が集まることもあった．瓦礫は膨大な量であったが，多くの人たちのご協力により，一夏で概ね撤去が終わった．一緒に活動してくれる仲間ができ，いよいよ計画を実行する段階になり，まずは交流の拠点にするためカフェを作ることにした．資金の調達は寄付金や助成金を活用したいと考えいくつか申請を行った．しかし，結果はすべて不採用．その理由として災害危険区域であること，住民が少ないため費用対効果が低いこと，飲食店をやるにはあまりにも立地が悪いことなどがあげられた．資金面で行き詰まる結果となったが，諦めることなく計画を変更することにした．自己資金でできるよう新築ではなく，残った高台の築約100年の自宅を改装し，カフェにすることにした．このときも多くのボランティアの方に助けられ，個人で寄付金を持ち寄ってくださる方も現れた．約半年間の改装を行い，2013年3月11日にcafeはまぐり堂が誕生した（**Fig. 3**）．

3. cafeはまぐり堂

当初は教員を続けながら，プロジェクトを運営してくれる人を探す予定であった．当然のことながら周囲からも退職することを止められていたが，縁もゆかりもない土地にボランティアで来た人たちが身銭を切り尽力してくれる姿をみたときに自分も中途半端な気持ちではできないなと思った．ちょうど，3年生の担任だったこともあり，卒業生を出して退職し，カフェを経営していく道を選んだ．立ち上げメンバーはボランティアで関わってくれていた，元料理人，元パン職人，元クレーンオペレーターの3人である．皆カフェの経験はないものの，前職のスキルを活かし，店舗作り，メニュー開発，オペレーションの構築を行ってくれた．

カフェのメニューにはできる限り旬の地域食材を使うよう検討した．メインははまぐりセット（季節のお惣菜，おむすびまたはパン，味噌汁）（**Fig. 4**）と鹿カレー（**Fig. 5**）だ．荻浜地区はカキ養殖が主たる産業であり，副業としてコオナゴ漁，刺し網漁，定置網漁，カゴ漁，カギ漁などを行っている．近隣ではノリ養殖，ホヤ養殖，ワカメ養殖，

Fig. 3　cafeはまぐり堂

Fig. 4　はまぐりセット

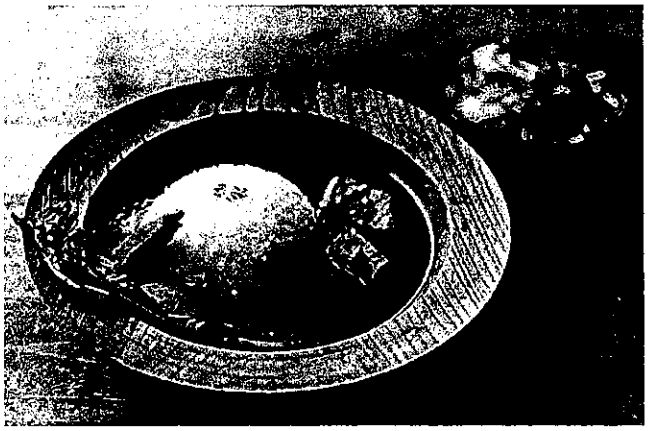

Fig. 5　鹿カレー

ギンザケ養殖などが行われている．それらを漁師さんから直接譲って頂いたり，市場に上がったものを主菜として提供することにした．主食は地元産のノリに岩塩，オリーブオイルで味付けしたのりパンを開発した．おむすびは毎朝かまどでご飯を炊き，自家製の梅干しなどを添えている．牡鹿半島ではニホンジカがここ15年ほどで爆発的に増加し，農作物や森林の食害，交通事故，法面の崩落などを引き起こしており，住民が苦慮している．海産物は豊富にあるが，肉がほとんどない地域のため色々と情報を集めているときに加工施設を持って鹿肉を販売している猟師さんがいることを知った．これまで鹿肉を食べたことがなく，近所の人からも鹿肉は臭くて硬く，あまり美味しくないという話を聞いていたため半信半疑であった．しかし，血抜きや熟成をしっかり行った鹿肉を食べたところ，臭みもなくとても美味しかった．まだあまり一般的には広まっていないが，低脂質高タンパクで鉄分が多い鹿肉や味わい豊かな脂身を持つイノシシ肉などのジビエ（野生鳥獣の肉）は近年，首都圏を中心に注目されている．フランスでは古くから貴族が猟期のみ楽しめる旬の高級料理として確立している．地域の厄介者を活用し，新たな名物にできればと考え鹿肉のカレーを提供することにした．その他，キッシュやデザートにも季節の食材を使い，コーヒーは県内の自家焙煎の豆，器も作家物を使用している．

オープンした3月から5月までは土日営業だったが，それ以降は週5日の営業を行っている．ターゲットは第一に地元の人を考えていた．津波で家をなくし，住み続けたいけれど住めない人たちに，せめてお茶をしながらまた集える場所を提供したかった．それと同時に県内外から訪れる人にも，浜の良さが伝わり，また来たい，住んでみたいと思ってもらえるようなカフェを目指した．年齢，性別も通常であれば絞るべきところであるが，お子さん連れから，若いカップル，お年寄りまで幅広く来てもらえるようメニューや空間作りを試行錯誤した．そんなとき，研修で訪れた島根県大田市にある石見銀山生活文化研究所で「復古創新」という言葉を教えて頂いた．復古創新とは先祖から受け継いだ伝統に学びつつ，時代に合った革新を繰り返すことである．地域の伝統文化や知恵を残すためにはただ古いものでなく，時代に合わせた革新が必要だと学んだ．それからこの「復古創新」と「牡鹿半島らしさ」がこれからいろいろなものをつくっていくテーマとなっている．また，当初はこの立地では中々集客できないだろうというのが周囲からの見方であったが，オープン初日から土日は一日50～60人の方に足を運んで頂いた．

これは知り合いに加え，カフェの建設や泥かき，瓦礫の撤去などに関わって下さったたくさんの方々がお客さんとして来て下さったり，知人に広めて頂いたことによるものである．資金がなかったことがたくさんの方とともにつくる形になり，思い入れが加わって結果としてファンを増やした．それからは「ともにつくる」ことをコンセプトとしてあげ，ただお客さんとして訪れるだけでなく，一緒に参加してもらうことによって継続的な交流を図ることを目指した．

カフェはまさに人との出会いの場である．浜の魅力を伝えるだけでなく，たくさんの出会いがあり，訪れる人同士が繋がっていくことはとても楽しい．また，様々な分野の方が関わって下さることは牡鹿半島の新たな発見にもなる．カフェや自然を場として，ヨガや流木クラフト，個展，ワークショップ，バーベキューなど様々な企画を行った．結婚式も3回行っており，漁船で入場し，海岸で式を挙げ，カツオに入刀する海の結婚式や間伐材で作ったステージにジビエ料理，流しそうめんなどをする森の結婚式といった結婚式場でやるものとは一風変わったものである．自然や地域の食材を生かした手づくりのアウトドア結婚式は新郎新婦，お客さん，そして震災後明るい話題が少なかった住民にとても喜んで頂いた．

初めの頃の平日は来客数が一桁という日もあったが，このような取り組みを続けていくうちに今では平日でも満席になることがしばしばあり，休日は一日100人を超えるお客さんで賑わっている．

4. セレクトショップ高見

カフェの隣家は2015年4月からセレクトショップ高見として営業を始めた（**Fig. 6**）．鹿革を使ったオリジナルの商品や石巻の陶芸家の器，大漁旗をリメイクした服や小物など，地域の作家や素材を使ったものを販売している（**Fig. 7**）．また一画を画廊とし，浜の石や鹿，クジラなど地域の素材をテーマに芸大生や地元アーティストの個展を行っている．この家も震災の被害は少なかったが，津波で奥さんが亡くなり市街地へと引っ越した．家主さんにプロジェクトに賛同して頂き，購入して活用させて頂くことにした．当初は浜の暮らしを体験できる漁家民宿として改装するため建築科の学生に協力を呼びかけた．全国7大学から15名が集まり，2泊3日の合宿を行い，地域性を出しながらも低コストで改装できる方法を検討した．明治大学の門脇研究室の協力を頂き，学生が卒業設計として住み込みで改装に取り組むことにした．床や建具は大工さんにお願いしたが，それ以外の解体，清掃，作り込みを学生やボランティアとともに行った．この家も築70年以上になるため，壁を撤去すると昔ながらの土壁や欄間，太い梁などが現れた．昔の良さを生かすため，土を山から削ってきて土壁を再現したり，新材を使う部分にも柿渋を塗ったり，焼杉に仕上げるなどの工夫を凝らした．改装が終わり，宿泊の許可申請の段階まで行ったが，復興工事の関係で現状では安全性の確保などが難しく，セレクトショップとすることにした．将来的には宿泊ができるように考えているが，これまで石巻で製作されたものが少なかったため，県外のお客さんや地元の方の贈答品として好評を得ている．また，画廊はこれまで少なかったクリエイティブな若手アーティストの表現の場となり，新たな交流が生まれるだけでなく，地域資源の可能性を引き出す場として機能している．

Fig. 6　セレクトショップ高見

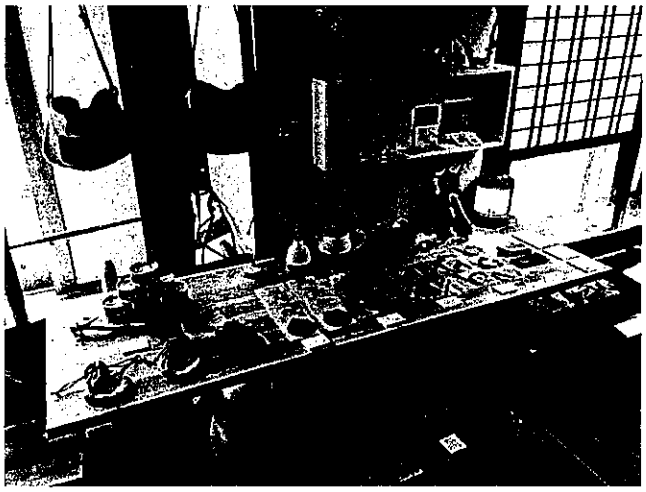

Fig. 7　鹿製品と家具

5. 自然を生かす

5.1 自然体験と暮らしの知恵を学ぶ

東日本大震災の津波によって多くの人命が奪われた．しかし，海のすぐ側にも関わらず牡鹿半島で亡くなった方の割合は市街地に比べ明らかに少ない．それは代々海の恩恵を受けて暮らしてきた浜の人はその脅威もまた知っているからである．地震があったら津波に備えすぐに高台に避難する．震災でライフラインが途絶えてもかまどでご飯を炊いたり，食材を採集しておかずを作り，沢水を引いてトイレや風呂を作って生活する知恵があった．我々世代はというと，幼い頃には海や山で遊びを工夫したり，怪我をしながら学んだことも多いが，そこまでの知恵や技術はない．これが古来から自然とともに暮らしてきた日本人の継承すべきものではないだろうか．現在，都市化が進むとともに田舎は過疎で子どもが減り，学校教育の現場でも自然に親しみ学ぶ機会が少なくなってきている．そこで，蛤浜プロジェクトの一環として，自然に親しんだり，暮らしの知恵を学ぶ，アクティビティーや自然学校，ワークショップなどを考えた．

まずは自然学校のフィールド作りを行った．カフェができたことによって，人が集まり情報発信がしやすくなったため，さらにたくさんのボランティアが協力してくれた．個人や団体だけでなく，企業研修や学生の活動などでも全国から来て頂き，山の倒木除去や間伐を行い，炊事場を建設した．炊事場はビジョンに賛同していただいた企業のCSRによって建設資金と自然学校のパイロットプログラム費用の寄付を頂いた．パイロットプログラムは5回実施し，初めは大学生・高校生を対象にリーダー研修を行った．自然体験を実践されている方や大学の先生，ボーイスカウトの方を講師に野営の方法や調理，魚介類を採取するなどの基本的なノウハウと，アイスブレイクやネイチャーゲームなどを学んだ（**Fig. 8**）．学生たちも初めての経験が多かったが楽しく興味を持って学んでいた．最後の回には実際に関東と地元の子供たち約50名が集まり，これまで学んだことを生かして自然学校を行った．まだ，安全面が確保できていないため，大人数での宿泊はできなかったが，自然の中で皆楽しく学べたようである．今後，さらに継続

Fig. 8 ネイチャーゲームの様子

して行っていきたいが，土地の使用や造成工事など課題があり，現在は休止している．将来的には森のようちえんやフリースクールも含め検討していきたい．

5.2 ツリーハウスの建設

牡鹿半島の魅力を引き出し，わざわざ足を運んでもらうためにはどんなことが必要かを考えていたときに出会ったのがツリーハウスだ．幼い頃，ゲゲゲの鬼太郎やトムソーヤなどを見て木の上の家に誰もが一度は憧れを抱いたかもしれない．そんな夢のような企画を実現している団体がある．一般社団法人東北ツリーハウス観光協会だ．東北のゆたかな自然，文化，産業などの資源を新しい視点で活かし，観光によって人的，物的交流の活性化を図り，東北の復興と発展に寄与することを目的としている．ツリーハウスの計画も東北ツリーハウス観光協会の協力と賛同頂いた企業の寄付によって実現することができた（Fig. 9）．デザインはこちらで考え，ツリーハウスビルダーの指導のもと木に登っての作業を行った．このときもボランティアを呼び掛け一緒に製作した．蛤浜は県道から少し外れており，目立たない場所のためお客さんがわかりづらかったが，ツリーハウスを県道沿いのバス停横に建設したため，ランドマークとしてお客さんを迎えている．好奇心旺盛な子どもはもちろん，大人も童心に返り，自然に触れるだけでなくワクワクする気持ちを呼び起こすスポットとなっている．

5.3 ネイチャーアクティビティー

大人にも子どもにも自然に親しむ機会を増やし，自然を大切にして豊かさと美しさを後世に残して行けるよう様々なアクティビティーを考えている．近年SUP（スタンドアップパドルサーフィン，Fig. 10）が関東を中心に流行している．ハワイ発祥のマリンスポーツで，サーフィンより浮力のある大型のボードに立って乗り，パドルを漕いで進むものである．波がない場所でもできるため，港湾や河川，湖でも実施することができる．カヤックのようにゆったりとクルージングするのに向いていて，牡鹿半島の地形はリアス式で様々な表情があるため絶好のスポットである．昨年，試験的に体験を行ったが，参加者からも好評で，今年は本格的にボートハウスを建設し常時体験できるものとして展開していく予定である．

Fig. 9 ツリーハウス

Fig. 10 SUP（スタンドアップパドルサーフィン）

牡鹿半島は2015年3月31日に南三陸金華山国定公園から三陸復興国立公園へと名称が変更された．また，2016年3月には青森から福島までの三陸沿岸総延長約700 kmにも及ぶみちのく潮風トレイルが開通した．森，里，川，海のつながりから生まれた自然を感じることができる道で，美しい自然と人々の暮らしを未来へとつないでいくことを目的とした環境省の事業である．このコース設定や道づくりにも関わっており，今後ガイドやツアー，トレイルランなどのイベントも検討している．

5.4　山林の再生と6次産業化

各集落の周辺はほとんどがスギ林になっている．しかし，山に入ってみると間伐を適切に行っていないため，痩せたスギが多く薄暗い．そのため，下草が生えず，表面の土砂が沢へと流れ込み水の流れも少なくなっている．また，保水力も弱く，大雨のときは土砂災害や鉄砲水が発生しやすくなっている．この要因は，戦後に建材として植林されたスギが，需要の低下や安価に入ってくる輸入材によって価値が下がり，管理を放棄したことによるものである．また，販売するために皆伐した後には本来であればまた植林を行うが，植えても価値が低いためそのままの状態の山も多く見られる．この荒れた山林の問題は，災害を引き起こし，暮らしを脅かすだけでなく，生態系にとっても大きな影響を与えている．カキ，ワカメ，ホヤなどの養殖が主要産業の牡鹿半島にとってプランクトンの餌となる栄養塩が山から供給されることが大切であるが，その供給が途絶えている．また，昔はアユやウナギ，サケ，サクラマスなどが遡上していたが，土砂で沢が埋まるようになり，これらを阻害している．間伐を適切に行ったスギ林は根も幹も太くなり，日光が入るため下草も生える．結果として災害が起こりにくくなると同時に生物多様性が豊かになり，海への栄養供給も良くなっていく．

この問題を考え取り組んでいるのが，自伐林業と6次産業化である．現在，木材の販売を業者に委託した場合，ほとんど利益が出ない．面積によっては赤字になることもある．そこで付加価値をつけて販売できるよう伐採から加工販売までを行うことにした．一部は製材して店舗の改装に使用したが，メインはオーダーでテーブルや椅子，棚などの家具や小物を製造している．スギは広葉樹に比べ柔らかく傷が付きやすかったり，反りが出やすいが，日本固有の伝統ある樹種のため加工法を検討して生かしていきたい．

6. 獣害対策

6.1　狩猟・有害獣駆除

山を豊かにするため，間伐や植林を行っていかなければならないが，大きな問題がある．それはニホンジカによる獣害である．前述したように近年爆発的に増加したニホンジカは，下草や植林した木を食べる．また，斜面の土を崩落させ，土砂災害を引き起こしたり，下草の定着を阻害している．農作物の食害や交通事故など産業や生活にも大きな影響を与えるため，有害獣駆除が行われているが，現在の捕獲ペース（石巻地域で年間約1,200頭）では抑制することができておらず，分布が拡大している．さらにハンターの高齢化と後継者不足が課題となっており対策が急務である．メインで行われている複数の犬や人で追い込み狩猟をする巻狩は，山深くに入って追いかけるため体力的にきつく，このままでは数年以内に実施できなくなってしまう．最近は許可のハードルが低い罠猟が普及してきており，昨年罠免許を取得し，蛤浜でも2頭捕獲した．鹿は警戒心が強く一度罠にかかるとしばらく近寄らないため畑を守るためには効果的である．

6.2　獣肉・革・角の有効利用

石巻でこれまで捕獲したニホンジカは猟師が自家消費または山中に埋設するかのどちらかであった．数年前から保健所の許可を取得し，一部を道の駅などで販売し始めた猟師がいるが，販路はわずかであった．ここに注目し，地域の未利用資源を活かすだけでなく，中々触れることのない狩猟のことや環境のことについて知るきっかけになればと思い，カフェの主菜の一つとして鹿肉を用いることにした．また，販路を拡大することができれば猟師から鹿を買い取ることができ，副業として狩猟が成り立つため後継者育成にもつながる．現在，持ち運びしやすく保存性が高いお土産品として大和煮の缶詰を販売し始め，ジャーキーやサラミ，生ハムなどの試作を行っている．また，革は日本では古くから武具や印伝など日常的に用いられてきたが，近年は量産しやすい牛革や豚革に取って代わられている．天然の鹿革は傷や個体差が大きいため扱いづらいところがあるが，牛に比べとても柔らかく耐久性や通気性が良いため活かす方法を考えている．課題となっている鹿革を全国から集めて有効活用するため，MATAGIプロジェクトという国を挙げてのプロジェクトがある．肉を仕入れるときに皮も譲ってもらい，下処理をした皮を東京墨田区にある山口産業へ送りなめしてもらっている．なめした革は自社で小物に加工したり，作家さんにバッグやアクセサリーに加工してもらい店頭で販売している．また，角もOCICAというブランドで震災後漁業ができなくなった近隣の浜のお母さんの副業として，角と漁網を使ったアクセサリーの製造・販売を行っている．店頭にはものづくりを趣味とするお客さんも訪れるため，製品だけでなく素材として革や角の販売も行っている．今後さらにオリジナルだけでなく，作家さんやアーティストと連携して角や革の可能性を広げていきたい．

この3年間で大分鹿肉が認知されるようになってきたが，活用されているのはほんの一部に過ぎない．今後埋設する量が増えれば環境への負荷も大きくなってくるため，活用する量を増やしていきたい．現在の加工処理場だけでは処理数に限りがあるため，新たに新設することを検討している．運営する際には捕獲から，処理，熟成，保存の方法をさらに追求し，より付加価値をつけて販売できるよう全国の情報を集めて検討している．また，それだけでなく，狩猟体験やワークショップなど交流人口の拡大につながることや命をいただく，自然と共生していくことなどを学べる教育プログラムなどより奥行きのあるプログラムを実施していきたい．

7. 漁業・農業

主要産業である養殖業は担い手不足と高齢化によって今後急速に減少していく．すでに震災をきっかけにやめた世

帯も多く，漁業経営の向上と担い手育成は急務である．現在，水産特区に指定し民間企業に漁業権を与え，住民を雇用する形態をとっている桃浦地区や石巻市，漁協，若手漁師団体（一社）フィッシャーマンジャパンと連携した水産業担い手育成事業など新たな取り組みも始まっている．弊団体も漁協の青年部と連携し，イベントによるカキのPRやツアーの企画，直販の仕組みづくりなどを行っている．今後は自社でも養殖業と漁業を行い，引き継いでいくと同時に新規雇用の創出につなげていきたい．その際には，新規養殖法の確立や締め方，氷冷法の工夫によってより品質が良く，高値で取引できる仕組みづくりを検討していきたい．

牡鹿半島では，かつては畑や米作りも盛んに行われており，自給自足の生活を送っていた．時代とともに経済優先になってくると効率が悪い米作りは衰退してきた．さらに震災の津波によって浸水した水田は塩害によって作付けできなくなり，耕作放棄によって荒れているところが多くなった．今後，食料自給，生物多様性，景観保護の観点からも復活させていきたい．

8. おわりに

蛤浜というわずか2世帯の集落を再生するプロジェクトを立ち上げて4年が経過した．多くの方々のご協力によって一つ一つ形になってきている．cafeはまぐり堂はオープンから3年が経ち，県内外から年間約15,000人，3年間で40,000人以上の方に足を運んで頂いた．これは被災地だけでなく，全国の地方が過疎や人口減少で悩んでいる中で一つの成果を残すことができたと思っている．しかしながら，交流人口の増加が比例して住民の幸せにつながるものではないことも感じている．これまで静かな暮らしを営んでいた人にとっては交流人口の急激な増加がストレスに感じたり，動線が重なり主要産業である漁業の妨げになってしまうこともある．今後は適切な交流人口の維持を図り，カフェの交流の場，情報発信の場としての魅力や人脈を活かしながら，地域課題から新たな産業を立ち上げていきたい．現在，20～30代を中心に7名の雇用が生まれている．初めはIターン者のみであったが，雇用が生まれたことによってUターン者が増えバランスが良くなってきた．まだまだ少ない数ではあるが，住民だけではできない草刈りや雪かき，災害対策などを協力して行っている．移住希望者も増えてきており，現状では浸水域は災害危険区域に指定されているためこれ以上住居を増やすことができないが，今後行政にも働きかけて対策を考えていきたい．住居を増やすことができないとしても，近隣の集落と連携し，居住地の集積や雇用の創出によって維持継続できる方法を探っていきたい．また，集落の継続，事業の創出には人材育成が不可欠である．学生や若い世代が積極的に関わって先人から学ぶ仕組みを作り，将来の担い手を育てていかなければならない．

成熟した日本社会は急激な人口減少時代に入ってきており，これまでの成長期のように作れば売れるといった時代ではなくなった．より品質の良いもの，求められているものを作っていかなければ廃れてしまう．日本の食料自給率（カロリーベース）は40％を割っているにも関わらず，一次産業は衰退する一方である．海外から効率化，大規模化されたものが大量に入ってくるようになり，安全性が不確かなものも多い．このままでは安全性だけでなく，日本の良さである旬のものや多種多様なものが食卓から失われてしまう．それぞれは小さいかもしれないが，日本各地の里海・里山を守ることが安心・安全で豊かな食卓を守っていくことにつながるであろう．また，長い年月をかけて培われた自然とともに暮らしていく日本人の知恵と文化は，一度失われたら取り戻すことが極めて困難になる．我々世代が新しい技術と方法を探求しながら，しっかりと引き継いでいきたい．

引用文献

1) 石巻市ホームページ，“東日本大震災関連情報，被災状況（人的被害）平成28年6月現在”，(http://www.city.ishinomaki.lg.jp/cont/10106000/7253/20141016145443.html) (accessed 2016.7.14)
2) 石巻市ホームページ，“統計書 第3章 人口 2. 住民基本台帳による男女別人口及び世帯数の推移”，(http://www.city.ishinomaki.lg.jp/cont/10102000/0040/3914/azachoubetu1607.xls) (accessed 2016.7.12)

（平成28年6月6日受付
Received June 6, 2016）